

ラウンドテーブル報告

近隣校における教員研修の在り方

—よりよい研修の在り方の模索—

創価大学教職大学院 院生

椿 田 克 之

話題提供者 鈴木 富雄（創価大学教職大学院 院生）

久保 明彦（創価大学教職大学院 院生）

指定討論者 木全 力夫（創価大学教職大学院 教授）

企画・司会 椿田 克之（創価大学教職大学院 院生）

I はじめに

学校現場では、教職大学院制度や免許更新制度など教師の資質向上を目的とした新たな取り組みや教師の力量形成のための様々な研修の実施、参加が推進されている。しかし、多忙な中で時間を作って研修会に参加した教師からは「実際に自分の力量が高まった」「明日からの授業に生かせる」という前向きな意見を聞くことは多くないことが窺える。

このような現状をふまえ、教師の力量形成に役立つ研修とはどのようなものなのか、どのような研修がこれから必要とされているのか、今回、教職大学院の授業の一環として教員研修の在り方について模索を行った。その中で学区域が隣接している小学校3、4校の教職員が集まって行う「近隣校における研修」に焦点を絞り研究を深めた。このことを踏まえて、よりよい研修の在り方について検討したいと考え、本ラウンドテーブルで提案し、課題を検討することとした。

本ラウンドテーブルでは、話題提供者として加わった鈴木富雄、久保明彦の両院生、参加した院生や創価大学の教授の皆様、さらに指定討論者として入っていただいた木全力夫（創価大学教職大学院研究科長）先生の力添えもあり、充実した内容で語り合うことができた。

キーワード：「教員研修」「近隣校」「力量形成」

Ⅱ 討 論 か ら

1 現状の教員研修を近隣校で行う体制へ

現在、学級崩壊や学力低下などの諸問題の原因の一つとして教師の指導力不足が指摘されている。その改善策として、教師の授業力や質の向上のための研修が様々な内容で行われている。初任者、2～4年次、10年目研修。そのほかに食育や人権など多様な社会や保護者の変化に伴う新たな課題に対応する力を養うための研修も行われている。

しかし、参加している教師からは、「本当に必要な研修だった」「即現場で活かせる内容だった」という話を聞くことはそう多くない。また、自分の学級を空け、他の教師に補教をお願いして、移動に時間をかけて行ったが、あまり参考にならなかったという話もある。

研修を企画する側として考えた時に、より内容を具体的に充実した研修にしようとする参加対象者が絞られ、また、多くの人数を対象にすると内容が薄くなってしまうという現実もあることがわかってきた。

そこで、よりよい研修の在り方を考えた時に、近隣の3校ほどの教師が集まることでより充実した研修ができるのではないかと考えた。その利点として次のことが挙げられる。

- ・地域の特色を生かした研修ができる。
- ・小規模校においては、話し合いやすい適度な人数で校内研究ができる。
- ・初任者研修ではより具体的な現場にあった話し合いができる。
- ・移動時間を短く短縮できる。
- ・自分たちで研修の企画、運営ができる。

さらに、「近隣校における研修」について、既に取り組みを行っている事例が紹介された。

2 実際に取り組まれている近隣校研修

話題提供者の鈴木が、北区のファミリー校の取り組みを紹介。北区全体として近隣の数校ごとにファミリー校としての枠組みが行政によって決められ、総合的な学習などの授業研究会を実施。サブファミリーとして中学校教員も参加し、小中の連携を兼ねながら地域の実態に合った課題に取り組んでいるという話題を提供した。それによって、ラウンドテーブル参加者からも事例が紹介された。

富山市では、小学校教育研究として8区域に分かれ、各区域で教務主任や校長が中心になって研修が考えられ、行われている。バラエティに富んだ内容を考える区域では音楽会を行ったこともあった。区域内で学年別に部会をするなど“顔が見える”研

修ができる。愛知では、ある小学校が中心となって幼小中が連携した授業研究の取組、市内中学校を核として年3回、ブロックごとで研究テーマを設定し課題に取り組んでいる。

日本の各地で「近隣校による研修」が実施されていることは理解できたが、それぞれに課題があることも確認された。研修を行う時間の確保が難しいこと、より充実した研修にするために参加者一人一人が課題と解決策をもって臨むため、研修に参加するまでの準備に時間を費やすこと。

それらのことから、どのような研修についても、その課題を自分の課題と捉え、参加者ではなく主催者の一人という意識を持って研修に臨むことが大切であり、どのような形の研修を行ってもその意識がないとより充実した研修にはならないということが確認された。

3 よりよい研修のあり方について

そして、「近隣校における研修」で取り組む具体的な内容について話題提供者の久保より、いくつかの事例を通しながら話題を提供した。幼小中の連携では、同じ課題についても校種の違いによる視点の角度の違いが解決のきっかけになったが、皆が集まって研修に参加できる時間設定が難しくなかなか進まないこと。

また、服務研修は、校長を中心にして進められたが、校内職員だけでは緊張感がなく、惰性に流されやすいということがある。各学校や地域によって課題に違いがあるので、一概には言えないが、大切なことは無理をせずにまずはできることからである。

各校の実情があるため、「一緒に研修をしましょう」と各学校間で連携を取ることは現状の多忙な職務からは実施が難しい。そのためにある程度行政が枠組みを決める必要がある。その決まった枠組みの中で、じっくりと話し合い、課題を決めて研修を行うことも一つの方法として考えた。

しかし、どのような枠組みにおいても、教員研修においては日々の実践や学校でどのような教育の取り組みが行われているかが大事となってくる。一人ひとりの教育の課題について、心を開いて経験を分かち合う研修の場が今、必要である。研修は形式的になつては意味がない。

機械的にやればよいものでもない。形式より実質、必然性のあるものが研修であり、それが教員研修の本来あるべき姿である。研修はしたい時に集まって行う。身近な課題に着想し、お互いに分かち合っていく研修が、一番効果がある。そのような意識を現職の教員が持つことが大切である。

富山も元々は、任意の団体から始まり、現在の教育会の形が出来上がっている。教員異動後、地域の課題は何なのかをしっかりと話し合う。そして中心となる課題を決め、インフォーマルな場で教務主任が近隣校同士で話し合い、特定の教員への協力を得られるように要請する。そしてその内容を周知し、参加者はテーマに沿った実践を

持ち寄り研修会が始まる。

これらの話を受け、指定討論者の木全力夫は、長野県の取り組みを紹介。上水内郡では任意団体として教育会を有志によって立ち上げ、大正時代から近隣の学校で研修を行った。授業記録を作り参加者に配布し、話し合う。授業を見合いながら記録を作って授業分析を行い、成果を校長に伝え、各地域に実践記録作りが広まっていったという。

よい研修の事例を話し合っていく中で、トップダウンの研修会よりもボトムアップでの研修会、フォーマルよりもインフォーマルのほうが本当の意味で実のある研修ではないかということになってきた。研修で大切なことは制度を決めれば解決するという合理的なものではない。現場の抱えている課題についてオープンにし、お互いに信頼しあいながら知恵を分かち合っていくような研修会がこれからの日本には必要である。

学校現場で行う授業研究は、諸外国では「ラーニングスタディ」と言われている。現在日本の授業研究から学べという姿勢で、日本の教育研究が諸外国から注目され始めたという。従来からある校内研究の伝統は、日本の財産である。このことを大切にしながらスクールリーダーとして全国に広げていってほしいという木全の話でラウンドテーブルは終了した。

Ⅲ おわりに

新たな教育課題が起き、それに対応するための教師の資質向上への取り組みが注目されている。新たな課題だから新たな取組みという安易な発想ではなく、今まで取り組んできたことを見直し、活かしていくという積み上げの大切さを実感した。

さらに、今まで取り組んでいたことが、古いのではなく常に新しいものであって、その質を低下させないこと、さらに更新させていくことが大切であるということ。そして、教師自身がさらに自分自身を更新させていこうという意識を持つことの大切さを本ラウンドテーブルで確認することができた。